

デーリー東北

2026年(令和8年)7月8日(水曜日) (9)

「魚香寿司(ユーシャン ス シン ス)」という料理は存在しない。私がつくった造語であり、北京電影学院の卒業制作のタイトルでもある。

物語の主人公は、夏休みに北京へ語学留学にやってくる日本人留学生と、ホームステイ先で一人暮らしをするおばあさんだ。言葉の壁や文化の違いから、二人の共同生活にはさまざまなすれ違いや衝突が生まれるが、少しずつ心を通わせていく。そんな15分の短編映画である。

「魚香」とは中華料理でよく用いられる味付けの一つであり、「寿司」は日本を代表する料理だ。二つの文化を象徴する言葉を組み合わせたこのタイトルは、作品のテーマを最も端的に表しているように思えた。

中国唯一の国立映画大学である北京電影学院。私が所属していた広告監督専攻は、約千人の受験生からわずか10人が選ばれる少数精鋭のコースだった。湖南省の片田舎から憧れの北京へ出てきた私は最年少であり、映像制作の経験は誰よりも少なかった。

作品講評のたびに先生

ユーシャン ス シン ス 魚香寿司

—— 戴 周杰



著作権保護のため
画像を表示できません

「朽ちゆくマイルポスト」
橋本竜則
|| 第3回八美の会展 ||

方からは「才能がない子」と厳しく言われた。退学という選択肢が頭をよぎったこともあったが、理解ある両親に励まされ、自分の中の何かを証明したいという思いだけは捨てられなかった。この『魚香寿司』は、まさに当時の私にとつて最後のチャンスでもあった。

師匠の助言もあり、同級生たちがCM作品で卒業制作に臨む中、私はただ一人、短編映画をつくることを選んだ。しかもテーマは日中関係。日本

留学を決めたばかりで行ったことすらない私にとつて、決して簡単な題材ではなかった。

日本人留学生を演じたのは、大学の後輩である呉くんだった。日本で生まれ育ったサッカー少年で、日本国籍を持つていないという理由でナショナルチームへの道が閉ざされ、サッカー選手の夢を断念した。一方、おばあさん役の宋さんは、北京出身のベテラン女優。戦争の記憶がまだ身近な世代であり、日本に対して決して親しみだけを抱いているわけではなかった。

日本に深い愛着を持つ呉くんと、日本に複雑な感情を抱く宋さん。作中だけでなく現実でも衝突が生じるのではないかと心配していたが、恐る恐る始まった撮影現場で、二人は互いの話に耳を傾け、それぞれの思いを語り合うようになり、気がつけば本当の祖母と孫のような温かな関係になっていた。

ラストシーンでは、帰国する留学生をおばあさんが見送る。その場面に、私は役柄を超えた何かを感じた。そこにいたのは演技をする宋さんではなく、本当に呉くんを送り出そうとしている一人の人間の姿だった。

私たちは過去の歴史を変えることができない。しかし、今を生きる人々が互いに向き合い、相手を理解しようとしながら日々を積み重ねていくことはできる。

悩みながらつくり上げたこの映画は、振り返ってみれば、私なりの日中交流へのささやかな祝福だったのかもしれない。そして何より、「才能がない子」と言われ続けた私を信じ、力を貸してくれた呉くんと宋さんに捧げたいと完成させた作品だ。

いつの日か、本当の「魚香寿司」を食べてみたい。(たい・しゅうき || 八戸工業大感性デザイン学部助教、中国湖南省出身、八戸市在住)

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。